聞け、イスラエルよ。主は私たちの神、主は唯一である。　申命記　6章4節

先週は、聖書が神の霊感によって書かれた誤りなき神のことばだということ、聖書はイエスさまを証ししていることを学びました。聖書を無視して、神を知ることも、信じることも、神に仕えることもできません。神がご自身を啓示する唯一の手段は聖書です。ですから、神を知りたければ聖書を読まなければなりません。聖書を毎日通読しましょう。毎日一章読むと、創世記から黙示録まで三年で通読できます。毎日三章読むと、一年で通読できます。

「聞け、イスラエルよ。主は私たちの神、主は唯一である。」（申命記 6 章 4 節）イスラエル人は何よりも神のことばを「聞く」ことを大切にします。それで、ここを読み上げる時には、息を思い切り吸ってから一息で朗読します。それは、息の続く限り、つまり命ある限り神のことばを聞くという彼らの精神を後の世代に継承する工夫です。

イスラエル人が大切にしたように、神に聞くことは私たちにとって何よりも大切なことです。聖書に登場する信仰の先輩たちは、神の声を聞いて人生が変えられました。ノアは、「箱舟を造れ」との神の声を聞いて、人類の滅亡から救われました。漁師ペテロは、「わたしについて来なさい」との主の声を聞いて、「人間を漁る漁師」になります。「これこそあなたがたのいのち」とある通り、神のことばにはいのちがあり、人を救う力があります（申命記 32:47）。

のみならず、神のことばには人類の歴史を造り変える力があります。事実、神のことばは世界の歴史を動かし変えてきました。神のことばに聞き従うことが、罪の世を造り変える最大の方策です。このことを考えてみましょう。

モーセが「わたしの民を救え」との主の声に聞き従った時、イスラエルはエジプトから救い出されて、イスラエルと世界の新しい歴史が始まりました。新約の時代になると、神に敵対するパウロが「なぜわたしを迫害するのか」との主の声に聞き従った時、救われたパウロを通して、福音はパレスチナの枠を超えて小アジアとヨーロッパ、ローマにまで伝わっていきます。これらはすべて、彼らが神のことばに単純に聞き従った結果でした。

先週の説教で、「戦時下、イエスさまのためにいのちを捨てた聖徒たちは、聖書の教えを文字通りに実践して殉教した」と話したのですが、説明が足りなかったと思いますので、以下、このことを少し詳しくお話しします。

戦時下、日本によって神社参拝が朝鮮にも強制された時、聖書を誤りなき神のことばと文字通りに信じた朝鮮の牧師たちは、神社参拝が十戒の第一戒と二戒に背く罪だと考えました。それで、彼らは神社参拝することはできないと拒否します。そして、さらには、神社参拝は神に背く罪だから、聖書の神を信じる者はこれをしてはならないと説教もしました。これにより、神社参拝を拒否した朱基徹牧師をはじめとする朝鮮の牧師たちは、日本の政府に弾圧され、投獄され、拷問されて、殺されました。死に至るまで忠実に主に従い、主の教えに従って死んだのですから殉教です。同じ信仰を持つ 30 余名の牧師は、日本の敗戦の日まで獄中で抵抗して「出獄聖徒」と呼ばれました。

一方で、こうした抵抗、殉教者を嘲笑う牧師もいました。彼らは聖書を文字通りには信じません。聖書は誤りなき神のことばとは信じず、聖書に記されているのは単なるおとぎ話、神話であり、人生教訓、道徳に過ぎないと解釈します。すべて人間中心で、自分に都合の良いように解釈します。その結果、神ならぬものを神として拝むことを禁じる十戒の戒めも神のことばとは文字通り信じないので、神社も参拝します。彼らにとっては、こんなことのために死ぬなどというのは愚の骨頂です。殉教など全く意味が無い「無駄死に」であり「犬死に」と考えたのです。

でも、殉教者たちが聖書を主の教えと文字通り信じて従ったのは、本当に意味の無いことだったのでしょうか。これを理解するには当時の状況を知る必要があります。神社参拝が強制された背景には、元々不法な朝鮮侵略と、これまた不法な満州支配に加えて、日本が 1937 年泥沼の日中戦争を始めると同時に、1941 年には太平洋戦争に突入し、同じファシズムの独伊と中立国を除く、米英蘭をはじめとするほとんど全世界の国を敵に回して大戦争するに至った時代状況があります。こうした勝ち目の無い戦争を国家総動員で戦うには、戦争政策への批判を徹底的に弾圧して封殺すると共に、政府に絶対忠誠を誓わせて戦争に動員する必要があります。それで政府は一連の弾圧法を矢継ぎ早に作ります。そして、戦争政策への絶対的な忠誠を誓わせる儀式として「神社参拝」を強制するのです。

元来、日本の神社のルーツはバラバラでした。古くからその地域にあったもの、仏教や儒教と習合したものなど様々です。でも、明治政府が全国の神社を無理やり統合し、勝手に格付けして新たな神道を創作します。それが「国家神道」です。天皇制を「国家の基軸」とするためでした。全国の神社の頂点に伊勢神宮を置き、その祭神、天照大神の子が天皇だとします。「明治神宮」のように天皇が神であることを印象づける露骨な天皇神社を創作し、各家に「神棚」を作らせて、どの神社を拝んでも天照大神と天皇を拝めるようにします。そうして、神社を拝ませることを、天皇と戦争政策への絶対忠誠を誓う儀式とするのでした。神社参拝強制の圧力は、戦況が切羽詰まるほど強まります。神社参拝しない者は「非国民」呼ばわりされて、弾圧され、殺されました。最後まで強行に神社参拝の強制に抵抗していた朝鮮の長老教会は、総督府から「朝鮮統治上の癌」と呼ばれて、徹底的に弾圧されました。

「癌」と言えば恐ろしい病です。つまり、神社参拝しない人が「癌」と呼ばれたということは、裏を返せば当時の政府は神社参拝を拒否する抵抗を実はそれほど恐れていたのだという事実が見えてきます。もともと不法な朝鮮統治と戦争です。国家総動員で戦わなければなりません。それなのに、天皇への絶対忠誠を誓う神社参拝はしない、加えて神社参拝が罪だと説教される、そしてそれに同調する人が続々と増えていくなら、間違いなく戦争政策は崩壊します。だからこそ、それを全力で弾圧しなければなりませんでした。神社参拝の強制に抵抗する人もいのちがけでしたが、政府もまた国の存亡を賭けてこれを阻止します。こうして両者は自らの存亡を賭けて激突したのです。

以上見てきたように、文字通り聖書を信じて神のことばに従うことは、断じて意味の無いことではありません。それどころか、当時の日本と朝鮮、アジアには必要なことでした。つまり、世の罪に巻き込まれずに、神のことばに従うことは、罪を犯す国家に対する最強の抵抗となるのです。そして、それは、世の悪と真正面から闘って、罪の世を変革していくこととなります。世界を造った神のことばこそが、真に世界を造り変えることができるのです。